

## ジッド＝リストの『経済学説史』

——20世紀転換期フランスにおける経済学観の変容——

栗田啓子

### はじめに

本稿では、シャルル・ジッド (Charles Gide: 1847-1932) とシャルル・リスト (Charles Rist: 1874-1955) が1909年に出版した『経済学説史—フィジオクラートから現代まで (*Histoire des doctrines économiques depuis les physiocrates jusqu'à nos jours*)』を主要な分析対象として、フランスにおける経済学史研究の特徴と社会的役割を考察することにした<sup>1)</sup>。換言すれば、ドゥルプラスが、2002年に刊行された『経済学史の未来』において、今日まで続いていると指摘した、フランスにおける経済学史のつぎのような独特な位置づけがなぜ生まれたのか、そして、そのことがフランスにおける経済学史研究の内容にどのような特徴を与えたのかを明らかにすることが本稿の課題である。

フランスにおける経済学史は、現在においてもなお、経済学の領域に属する下位の専門分野、あるいは文化史や科学史に属する学問領域として位置づけられるというよりも、経済学そのものを構成する要素のひとつだと考えられている。(Deleplace 2002, 110)

上に掲げたふたつの課題を達成するために、

まず、I節「経済学の制度化と経済学史講義」でジッド＝リストの『経済学説史』が誕生した歴史的背景を概観し、II節「ジッドとリスト」で二人の著者の略歴と執筆の姿勢を確認することにした。III節「ジッド＝リストの『経済学説史』とフランス学派」では、(1) フランスの経済学史としての固有の特徴が見いだされるのか、また、(2) 20世紀初頭の経済学史としての刻印が押されているのか、の2点を評価基準として、この『経済学説史』の内容を分析する。最後に、IV節「19世紀末における経済学観の変容と『経済学史』」で19世紀から20世紀にかけての経済学の史的展開のなかに、ジッド＝リストの『経済学説史』を位置づけることを試みたいと思う。

### I 経済学の制度化と経済学史講義

#### 1. グラン・ゼコール (Grandes Écoles) の経済学

19世紀末から20世紀初頭にかけてフランスで経済学史のテキストの出版が相次いだ背景には、フランスにおける経済学の制度化の進展が存在した<sup>2)</sup>。フランスではすでに1795年に高等師範学校で正規の経済学講座が開設され、このあと、講座の名称にはそれぞれ違いがあるが、1820年に工芸学院 (Conservatoire des Arts et

Métiers), 1832年にコレージュ・ド・フランス, 1847年に土木学校 (École des ponts et chaussées) と、実質的に経済学を講義する学校が現れた<sup>3)</sup>。市民に公開されているコレージュ・ド・フランスを除いて、残りのふたつの学校は、グラン・ゼコールと総称される、フランスのエリート養成機関である。周知のことかも知れないが、フランスの高等教育は、このグラン・ゼコールと大学から成る二重構造を特徴としている。すでに存在していたエンジニア養成学校などを含めてフランス革命期に体制が確立されたグラン・ゼコールは、1794年にナポレオンが創設した理工科学校 (École polytechnique) を頂点とし、厳しい入学試験で知られ、高級官僚や高等学校の教員、そして研究者の育成を基本的な使命としている。一方、古い歴史を誇る大学は<sup>4)</sup>、「バカロレア」と呼ばれる高等学校修了認定資格を持つ者すべてに無試験で入学が許されている。その結果、大学は、実際には高名な研究者を生み出してはいるものの、基本的にはグラン・ゼコール出身者の下位に位置する人材の育成機関の役割を果たすこととなった。そして、この高等教育の棲み分けは、経済学教育の棲み分けを派生させたのである。

もっとも、グラン・ゼコール内部でも、教授される経済学の内容が必ずしも統一されていた訳ではなかった。当初優勢だったのは、フランス古典派である。工芸学院ではJ-B.セイ (Jean-Baptiste Say; 1767-1832) が「産業経済学」という名称で経済学を講義し、土木学校の初代経済学教授には、自由主義経済学者として知られるジョゼフ・ガルニエ (Joseph Garnier; 1813-1881) が就任している。このガルニエの土木学校の講義の特徴は、「自由主義の厳しい伝統」に従っていることと、「実践的な要素をまったく含まない」ことにあったといわれている<sup>5)</sup>。この土木学校から、エンジニア・エコノミストのジュール・デュピユイ (Jules Dupuit; 1804-1866) が誕生したのだが<sup>6)</sup>、1880年代に入ると、

第二世代のエンジニア・エコノミストたちがグラン・ゼコールで教鞭を執るようになる<sup>7)</sup>。こうして、グラン・ゼコールにおける経済学講座には、ふたつの相容れない流れが共存する状況が生じるようになった。すなわち、自由主義を掲げ、経済学における数学の使用を拒絶するフランス古典派という多数派の傍らで、エンジニア養成を目標とするグラン・ゼコールにおいては、数理経済学の伝統が細々と、しかし確実に生き続けていったのである<sup>8)</sup>。

## 2. 法学部の経済学

1で見たように、数少ないとはいえ、19世紀の前半からグラン・ゼコールに経済学講座が設置されていたのに対して、大学で経済学が教えられるようになったのは、19世紀後半に入ってからだった。1877年にようやく、ドイツに倣って、法学部に経済学講座が導入されたのである<sup>9)</sup>。この経済学の導入という法学部改革は、第三共和制における教育制度改革の一環だった。理工科学校の歴史を緻密に辿ったシンによると、支持層である中産階級の教育水準を上げ、権力基盤を固めるために、政府はそれまで支配層を生み出してきたグラン・ゼコールを排し、大学における科学教育や経済学教育を強化したのである<sup>10)</sup>。学位については、1903年にケンブリッジ大学の卒業試験に「経済学・政治学優等卒業試験」を導入したイギリスより早く、1895年に法学博士号の一分野として、「政治・経済科学博士号 (doctorat es sciences politique et économique)」が創設されている<sup>11)</sup>。そして、この経済学博士号の設置と同時に、すべての法学部に「経済学説史 (histoire des doctrines économiques)」講座の開講が義務づけられたのである。20世紀初頭のパリ大学を例にとると、法学部の35の講義のうち、経済学系の講義は8講義に上っている<sup>12)</sup>。

これら法学部の経済学講座は、ジッドが「あらゆる種の独占体制」(Gide 1896, 159) と批判した、

パリのグラン・ゼコールにおける自由主義を基調とする経済学教育とは異なった特徴を持っていた。確かに自由主義的な経済学者の参加は皆無とは言えないが、パリ法学部のコベス (Paul Cauwès; 1843-1917) を代表とする保護主義を主張する経済学者とともに、19世紀末から力を持ち始めた「社会経済 (économie sociale)」に関心を持つ多くの経済学者たちが法学部の経済学講座を担当したのである<sup>13)</sup>。後者を代表するジッドは、J.-B. セイの流れを汲む自由主義的な『エコノミスト誌 (Journal des économistes)』(1841年創刊)に対抗して、多様な立場の論考を取り上げる『政治経済学雑誌 (Revue d'économie politique)』を1877年に創刊している<sup>14)</sup>。

ジッドが「大学における(経済学)教育と正統派経済学との断絶」(Gide 1896, 158)と表現したように、法学部における経済学講座の設置には、このような経済学の方向性をめぐる対立が影響していた。したがって、「経済学説史」講座も、多様な経済学のあり方を確認し、自由主義経済学による一元的な支配の見直しを促すという役割を担っていたと言える。こうして、ジッドとリストが「フランスでは経済学教育において、学説史に対してほかの国々と比べものにならないほど重要な地位が与えられている」(Gide et Rist 2000, IX)というような状況が生みだされたのである。本稿の冒頭で紹介したドゥルプラーズの表現を借りれば、フランスにおいて、経済学史が「経済学そのものを構成する要素のひとつ」とみなされてきた独特な位置づけの起源は、グラン・ゼコールと法学部の経済学教育のライバル関係にあったのである。逆に、管見の限りでは、グラン・ゼコールにおいて経済学史が講義されたことはほとんどなかったようである。もっとも、コレージュ・ド・フランスでは、1838年から1840年にかけて、ロッシ (Pellegrino Rossi; 1787-1848) が経済学史を教授しており、これが、フランス初の経済学史講義とされている<sup>15)</sup>。しかし、ドゥルプラーズが

指摘するように、エリート養成機関としてのグラン・ゼコールにおいては、最新の経済理論の教育が重要であり、歴史は顧みられなかったのかも知れない<sup>16)</sup>。ともあれ、経済学については、グラン・ゼコールにおける正統派の自由主義的で高度な(時に数理的な)経済学と法学部における非正統的で多様な経済学という棲み分けとともに、経済学史については、前者における欠落と後者における重視という対照的な取り扱いが生じたのである。

さらに、経済学史教育に与えられた重要性は、グラン・ゼコールとの対抗関係だけでなく、法学部に固有の負の要因にも起因していた。その負の要因とは、法学部という枠組みの中で、初学者に高度な経済理論の教育をする難しさだった。この困難を克服する手段として、経済学史講座の担当者たちは、経済学の歴史的展開を追求することによって、経済学の初歩的な知識を習得させようとしたのである。もっとも、経済学の初学者は、学生にとどまらなかった。経済学の制度化によって初めて経済学者の再生産が可能になるとすれば、制度化の初期に経済学の専門教育を受けた教師が不足するのは当然だった。これに加えて、経済学の導入に対する法学系の教員の抵抗もあり、経済学の教授に法学博士号を要求することが条件付けられた。その結果、多くの場合、後で紹介するジッドやリストのように、厳しい大学教授資格試験に合格したばかりの若い法学博士たちが経済学を担当することになった<sup>17)</sup>。そのような若い講師にとって、経済学史は彼ら自身が経済学の知識を確認し、深化させる方法でもあったのである。

このような複合的な理由によって、19世紀末から20世紀にかけて、法学部の経済学教育において経済学史の重要性が確立されていった。だからこそ、すでに述べたように、講座を担当する講師たちがつぎつぎとテキストブックを執筆するという状況が見られる結果となったのである。その最高峰というべきものが、1909

年に出版されたジッド=リストの『経済学説史』だった。

### 3. ジッド=リストの『経済学説史』の出版

ジッド=リストの『経済学説史』が登場する以前の経済学史の標準的なテキストは、1890年に2巻本として出版された、統計学者モーリス・ブロック (Maurice Block; 1816-1901) の『アダム・スミス以降の経済科学の進歩 (Les progrès de la science économique depuis Adam Smith)』だった。エトネによれば、ブロックのテキストは初学者向けであり、先に触れた若き経済学史担当者のテキストブックは、むしろ専門的なテキストとして使われていたということである<sup>18)</sup>。ブロック自身は、経済学史はもちろん、経済学さえも講義したことはなかったのだから、ジッド=リストの『経済学説史』が経済学史講義の担当者という専門家による概括的なテキストブックとして歓迎されたことは容易に想像できる。しかも、それは、講義の担当者からだけでなく、経済学者からも、つぎのような高い評価を受けたのである。

経済科学の観点から見て、ある重要な出来事が起こったことに言及せずに、我々は1909年を過去に送り、ただちに1910年が始まるかのように扱うことはできない。…1909年5月にパリのラローズ=テナン社から『経済学説史』が出版されたのである。これはまれに見る重要な著作だと思われる。(Walras 1910, 515)

レオン・ワルラスは、逝去の直前に日刊紙『ガゼット・ド・ローザンヌ』に送った原稿「経済学説 (Doctrines économiques)」に、こう記している。ジッドとワルラスの友好関係を考えると<sup>19)</sup>、ワルラスのこの好意的な評価が儀礼的なものであった可能性も否定できないが、それでも、ジッド=リストの『経済学説史』が版を重

ね、長期間にわたってフランス語圏の標準的な経済学史のテキストであり続けたことは事実である。また、日本を含め、10ヶ国で翻訳されたほど、海外でも高い評価を獲得している<sup>20)</sup>。

## II ジッドとリスト

『経済学説史』の内容の検討に入る前に、著者のジッドとリストの略歴を紹介し、両者の経済学史に対する姿勢の違いを確認しておこう。

### 1. シャルル・ジッド

一般的には、作家アンドレ・ジッド (André Gide; 1869-1951) の叔父として紹介される方が通りの良いシャルル・ジッドは、しかしながら、世紀転換期を代表する経済学者である。1847年にニームに近いユゼス (Uzès) の厳しいプロテスタントの家庭に生まれたジッドは、家族の伝統にしたがって、法学の勉強のためにパリに上ることになった。しかし、法学に関心を持ち得なかったジッドは、法学部よりもコレージュ・ド・フランスや文学部に足を運ぶことが多かったといわれている<sup>21)</sup>。そのような若きジッドは、1867年頃に「ロッチデール公正先駆者組合」を紹介する文章と出会い、フランスにおける協同組合運動の思想的根幹を築いたと後に評価されるキャリアを開始することになる。1872年に博士論文「宗教的領域におけるアソシアシオンの権利」で博士号を取得したジッドは、1874年に教授資格試験に合格し、ただちにボルドー大学法学部に就任した。ボルドーでは、自由選択科目の経済学を担当し、自由主義経済学者の最右翼であるバスティア批判に終始したとの伝説を残したのだが、1880年には「経済学」と「経済学説史」講座担当者としてモンペリエ大学法学部に着任した<sup>22)</sup>。モンペリエでは、協同組合運動に積極的に参加し、その理論的支柱を提供した。1900年に「社会経済学」講座を担当するために土木学校に迎えられ、これ以降、最終的にコレージュ・ド・フランスの「協同組合」

講座の教授にいたる教師生活をパリで送ることになる<sup>23)</sup>。『経済学説史』の執筆を決意した1903年には、1884年の初版以降すでに8版を数える『経済学原理』の著者として、また『政治経済学雑誌』の編集者として、ジッドは経済学界に揺るぎない地位を確保していた<sup>24)</sup>。

『経済学説史』について、講義で使うテキストを出版するという意図とともに、ジッドには、フランスにおける経済学教育としての経済学史の意義を確認するという意味合いがあったように思われる。実際彼は、1890年に*Political Science Quarterly*誌に「フランスにおける経済学派と経済学教育 (The Economic Schools and the Teaching of Political Economy in France)」を寄稿したのを皮切りに、1896年にパルグレイヴの経済学事典の「フランスの経済学派 (French School of Political Economy)」の項目を執筆し、1907年には『エコノミック・ジャーナル』に「20世紀初頭のフランスにおける経済学の著作 (Economic Literature in France at the Beginning of the Twentieth Century)」を発表している。これらの論文のタイトルを見てもわかるように、ジッドにおいては、フランス経済学の特徴を国際的に認知させようとするのとフランスにおける経済学史教育の重要性を訴えることが密接に関連していたといえるのではないだろうか。

## 2. シャルル・リスト

リストは1874年にスイスで生まれているが、彼もジッドと同様に、プロテスタントの家庭の出身である。1898年の「フランスにおける成人労働者の生活」と1899年の「労働災害に関するイギリスの立法」の2本の論文で博士号を取得している。これらの論文のタイトルが示しているように、ジッドとは異なり、リストは法学部で経済学の教育を受けた新しい世代に属する経済学者だったのである。彼は、1899年に経済学教授資格試験に合格したのち、モンペリエ大学のジッドの「経済学」と「経済学史」講

座を受け継いだ(1898-1913年)。1913年にはパリ大学法学部教授(「経済学」、「社会経済学」、「経済学史」担当)に任命されたが、第一次大戦中に金融・財政の専門家として知られるようになり、1926年にフランス銀行副総裁に任命されるなど、研究生活と銀行実務のふたつのキャリアを歩むことになった。このふたつのキャリアから生み出された著作として、1938年に出版された『ジョン・ロウから現代までの信用と貨幣に関する学説史 (*Histoire des doctrines relatives au crédit et à la monnaie depuis John Law jusqu'à nos jours*)』を挙げるができる。

ジッドが、モンペリエ大学の民法の教授から紹介されたリストを共同執筆者として選んだのは、自分の後任であると同時に、リストがドイツ語に堪能だったからだといわれている<sup>25)</sup>。しかしそれにとどまらず、両者がともにプロテスタントであり、ドレフュス擁護派であるという共通点があったことも重要な要因だと考えられる。さらに、このドレフュス擁護派の牙城とも呼ばれた民衆大学 (*Université populaire*) 運動に、ジッドとリストの二人とも参加していたことも無視できない<sup>26)</sup>。このように、世代は異なるものの、ジッドとリストは当時の社会問題に対して類似した姿勢を示していたのである。

もともと、共通の思想や信条が経済学史に対する共通の姿勢を保障するとは限らない。高名なジッドに共同執筆者に選ばれたことを名誉に思いながらも、ジッドとの執筆作業はリストにとって容易なものではなかった。『政治経済学雑誌』に発表したリストの「自伝」には、ジッドの執筆がなかなか進まないことに対する不満だけでなく、彼の人柄に対する批判まで書かれている (Rist 1955, 983-84)。とはいえ、リストのジッドに対する最大の不満は、経済学に対する評価の違いだった。リストはつぎのように回顧している。

|   |
|---|
| 序文 (Gide et Rist)                                     |
| 第1巻 創設者   |
| 第1章 フィジオクラート (Gide)                                   |
| 第2章 アダム・スミス (Rist)                                    |
| 第3章 悲観主義者. マルサスとリカードゥ (Gide)                          |
| 第2巻 敵対者   |
| 第1章 シスモンディと批判学派の起源 (Rist)                             |
| 第2章 サン=シモン, サン=シモン主義者および集産主義の起源 (Rist)                |
| 第3章 社会主義的アソシエーションист. オーエンとフーリエ (Gide), ルイ・ブラン (Rist) |
| 第4章 フレデリック・リストと国民経済学 (Rist)                           |
| 第5章 ブルドンと1848年の社会主義 (Rist)                            |
| 第3巻 自由主義  |
| 第1章 楽観主義者. パスティアとケアリイ (Gide)                          |
| 第2章 古典派経済学の最盛期と衰退. スチュアート・ミル (Gide)                   |
| 第4巻 離反者   |
| 第1章 歴史学派と方法論争 (Rist)                                  |
| 第2章 国家社会主義 (Rist)                                     |
| 第3章 マルクス主義 (Gide)                                     |
| 第5巻 19世紀末における学説の革新と社会的学説の展開                           |
| 第1章 快樂主義者 (Gide)                                      |
| 第2章 キリスト教に影響を受けた学説 (Gide)                             |
| 第3章 連帯主義者 (Gide)                                      |
| 第4章 地代理論とその応用 (Rist)                                  |
| 第5章 無政府主義者 (Rist)                                     |
| 第6巻 第一次世界大戦後における生産と交換の問題の支配 <sup>28)</sup>            |
| 第1章 国際貿易に関する理論の一般的な見直し (Rist)                         |
| 第2章 恐慌理論における対立 (Rist)                                 |
| 結論 (Gide et Rist)                                     |

図1 『経済学説史』目次

私は、ワルラスとメンガーの著作に我々の本の中心的な地位を与えるように努力し、自分の路線を守ろうとした。これに対してジッドは、彼が信奉する協同組合思想が経済学の到達点であると主張して譲らなかった。(Rist 1955, 983)

このような評価の違いを明らかにするため、リストはジッドにそれぞれの担当部分に署名を入れることを要求した。こうして、図1のように、目次に執筆者名を記載した『経済学説史』が誕生したのである<sup>27)</sup>。

### III ジッド=リストの『経済学説史』とフランス学派

#### 1. 『経済学説史』の4つの特徴

まず、ジッド=リストの『経済学説史』の特徴を大まかにまとめておくことから始めよう。第一の特徴は、歴史的な展開にそってはいるものの、基本的に学派ごとの叙述になっている点である。ジッドとリストは序文でこのことを「類縁性を基準として学説をひとつの家族と見なしてグループ化し、それらが現れた歴史的順序に従って紹介する」(Gide et Rist 2000, XIV)方法だと説明している。この経済理論のカatalog作成とも言える方法は、一人の経済学者の業績を経時的に追うという当時一般的だったスタイル

と比べて、学派のグルーピングによって読者の理論理解を容易にしたと歓迎されている<sup>29)</sup>。リストは、『ジョン・ロウから現代までの信用と貨幣に関する学説史』の序文においても、「私は、著作や人物に関する歴史ではなく、思想の歴史を書こうと努力した」(Rist 2002, 1)と述懐しており、『経済学説史』で採用した方法を彼が一貫して支持していたことがわかる。このように理論の類似性によってグルーピングした学派を中心に据えたことによって、第3巻第1章「楽観主義者」におけるバスティアとケアリィのケースのように、国境を越えた理論や思想の同一性を観察することが可能になったのである。

グルーピングに関して興味深いことは、リストが最重要視し、そして執筆者のジッドも新しい経済学として注目したワルラス理論を「快樂主義者」(第5巻第1章)に分類していることである。ワルラスに当てられているのは主に第3節「数理経済学」であるが、クルノやジェヴォンズ、メンガー、そしてパレートとともに、グループとして取り扱われている。そして、この「快樂主義者」に分類した経済学者たちに、経済学を「精密科学の状態に…作り上げようとした」ことを理由として、ジッドは「新古典派(néo-classique)」という名称を与えたのである(Gide et Rist 2000, 547)<sup>30)</sup>。このような学派を基本的単位とする叙述方法は、個別の経済学者に対する評価だけでなく、グループ分けの基準と学派に対する評価を共有しなければならなかったはずである。しかし、学派に対する評価について、二人の著者の意見は必ずしも一致していなかった。とくに同時代の理論に対する評価は分かれており、ジッドが第5巻第2章「キリスト教に影響を受けた学説」と第3章「連帯主義者」に多くのページを割いているのを見ると、II節2で紹介したリストの不満もよくわかる。だからこそリストは、彼に執筆を任された第4章「地代理論」の第3節「土地国有化のシステム」(Gide et Rist 2000, 667-75)で、ゴッセンと

並んでワルラスを再び取り上げたのではないだろうか。

このように、評価をめぐる両者の対立があったにもかかわらず、第二の特徴は、それぞれの学派をほぼ平等に取り扱っている点である<sup>31)</sup>。ジッドとリストも「序文」で著者や学説を取捨選択していることを認めながら、「この選択にはなんら規範的な意味はない。我々は、道徳性の基準や、社会的有用性の基準、さらには真理の基準でもってさえ、ある学派を推奨し、ほかの学派を退ける意図は全く持っていない」(Gide et Rist 2000, XII-XIII)と強調している。多様な経済学のあり方を同じ比重で俯瞰するというこの方法こそ、例えばワルラスのように、自らの理論形成のために、あるいは自らの理論の正当性を証明するために歴史研究を行う経済学者とは異なり、専門の経済学史家としてのジッドとリストの『経済学説史』の大きな特徴だったのである<sup>32)</sup>。

このように、中立的な立場を打ち出している『経済学史』の叙述から二人の著者の経済学観を把握することは難しい。彼らにとって重要だったのは、取捨選択の基準が「正しかろうと間違っていようと、現在受け入れられている思想の形成に貢献した学説、現代思想に直接継承されていった学説に光をあてること」(Gide et Rist 2000, XIII)だった。ここから、現代理論に対するそれぞれの時代の経済理論の影響力を量ることが『経済学説史』の目標だったと結論することもできる。この引用文を見る限り、過去の理論の蓄積と修正の上に現代理論が成立すると考えていたという意味で、彼らは絶対主義的アプローチを採用していたと言えるだろう<sup>33)</sup>。だが、絶対主義的アプローチと言っても、彼らの捉え方はそう単純なものではなかった。というのは、IV節で検討するように、ジッドとリストが第5版までの最終巻(第5巻)で取り上げた現代理論は複数だったのである。つまり、過去からの理論の展開が最終的には一つの高度

な現代理論に集約されてゆくのだとしても、彼らが観察していたのは、時代の複合的な要因によって複数の異なる現代理論が成立している状況でしかなかったのである。したがって、ジッドとリストにとっては、複数の現代理論の存在を歴史的に説明することこそが、『経済学説史』のもっとも重要な目標だったと考えられる。そして、この目標が、主流派経済学の独占的な状況を打破するという法学部の経済学史講座の隠された目的に適っていたこともまた確かである。

第三の特徴は、『ヂード・リストの経済思想史 上巻』の書評を書いた手塚寿郎が正当にも指摘したように、「学説が環境から全く抽象されてゐる」ことであり、「夫々の思想家の生涯が二三の場合を除けば述べられてゐない」ことだった（手塚 1935, 178）<sup>34)</sup>。実際、手塚の第二の指摘については、例えば、アダム・スミスに関しても、その生涯は注での記述にとどめられている（Gide et Rist 2000, 56-57）。しかし、手塚が指摘した第一の欠点は、ジッドとリストが意識的に選択した方法だった。彼らは、「経済的環境が経済学者に対して及ぼす影響、もっとも抽象的な（理論を生み出した）経済学者に対してさえ及ぼす影響を否定することはできない」と認めながらも、『経済学説史』においては、思想の社会・歴史的背景を「ある特定の学説が出現したり、衰退したりすることを理解するために必要不可欠な場合にのみ」言及すると断っている（Gide et Rist 2000, X）。その「必要不可欠な場合」の一例として、第2巻第5章第3節「1848年の革命と社会主義の失墜」を挙げることができる。リストはここで、議会での議論の紹介を交えながら、1848年の革命の経緯を7ページにわたって詳細に説明し、「…それゆえに、1848年の社会主義の経験は、その現実の崩壊に引きずり込むような形で、（社会主義の）提唱者たちの理論を崩し去ったのである」（Gide et Rist 2000, 338）と結論づけている<sup>35)</sup>。

このように、ジッドとリストは社会・歴史的背景が理論形成に果たす役割を限定的に捉えていただけでなく、さらに進んで、つぎのように、その役割そのものに疑問を投げかけていた。

事実がある学説の誕生を説明するのに十分であるとは決して言えないことをよく理解する必要がある。それは、社会政策の理論だけでなく、程度は小さいかも知れないが、純粋に科学的な解釈についても言えることである。（Gide et Rist 2000, X）

ジッドとリストは、自分たちの社会・歴史的背景の影響力に対する懐疑的な姿勢を、セイとシスモンディ、バステティアとブルードンといったように、同時代に対照的な内容を持つ学説が共存することだけでなく、「異なった3ヶ国あるいは4ヶ国で、最終効用の理論が同時発生的に発見されたこと」（Gide et Rist 2000, X）によって説明している。この2種類の事実の認識こそが、これまで説明してきた『経済学説史』の3つの特徴——グルーピング、平等な取り扱い、社会・歴史的背景の軽視——を生み出したと言ってもよい。だがそれにとどまらず、「おわりに」で検討するように、この認識は、経済学の発展における競争的条件の重要性という彼ら独自の主張に根拠を与えるものでもあった。

最後に第四の特徴として、『経済学説史』の現代性を挙げておきたい。ジッドとリストは、多くの経済学史のテキストが思想の源泉を探ることに集中し、古い時代から始め、「反対に、現在の学説はかなり狭苦しい場所に押し込められているにすぎない」（Gide et Rist 2000, XI）状況に不満を抱いていた。すでに触れたように、彼らの最大の関心は現代思想にあったのである。その結果、『経済学説史』は始点を18世紀末に設定し、終点を現代理論に置くという構成を持つことになった。ジッド生存中の最終版である第5版では、第5巻「最近の学説」で、ペー

ム=バヴェルクやパレートなど、ジッドやリストと同時代の経済学者が紹介されている。さらに、ジッドの死後にリストが加えた第6巻は、「第一次世界大戦後における生産と交換の問題の支配」というタイトルを与えられ、第1章「国際貿易に関する理論の一般的な見直し」と第2章「恐慌理論における対立」から構成されている。再び引用するならば、「現在受け入れられている思想の形成に貢献した学説、現代思想に直接継承されていった学説に光をあてること」(Gide et Rist 2000, XIII) を目的とする『経済学説史』だったからこそ、20世紀初頭の経済学史としての意義を獲得することができたのである。

## 2. フランス経済学の特質の析出

フランスの経済学を国際的に認知させようとするジッドの努力は、ひとつには、フィジオクラート以降、フランスの経済学には見るべきものがないという一般的評価に対抗するためだった<sup>36)</sup>。しかし、この表向きの理由の裏にはもうひとつの隠された理由が存在していた。それは、普仏戦争での敗北によってあらゆる面で自信を失ったフランスに、フランス経済学の独自性あるいは独創性を再認識させることによって、フランスの経済学界だけでなく、アカデミックな世界全体に自信を取り戻させることだったのである<sup>37)</sup>。

ジッドは経済法則の普遍性を認める立場から、「フランス学派はありうるのか」(Gide 1890, 611) と、各国に固有の経済学の存在自体に疑問を呈しながらも、その一方で、フランス経済学の特質をつぎの3点に求めている。第一の特徴は、経済学を演繹的の科学ではなく帰納的な自然科学として捉える傾向である。彼によれば、経済学への数学の応用がフランスで広く観察されるのはそのためである<sup>38)</sup>。第二の特徴は、セイーシュバリエーバステリアという主流派経済学に固有のものだが、楽観主義の色彩を強く

持っていることである。これは、リカードゥやマルサスに代表されるイギリス経済学の悲観主義と対照をなしているとジッドは主張する<sup>39)</sup>。理論的には、イギリス古典派の核を構成するリカードゥ地代論・マルサス人口論・賃金基金説という3つの要素の「楽観主義」における拒否として現れるが、その背景には、エスタブリッシュメントとしての主流派経済学の政治・経済システムの安定性を重視する姿勢が存在するとジッドは分析している<sup>40)</sup>。

最後にジッドは、第三の特徴として独創性を挙げ、効用理論とその展開としての限界効用理論をフランスに起源を持つ独創的な理論と評価している。彼は正当にも、デュピュイが相対的効用 (utilité relative) と呼んだ消費者余剰概念を取り上げ、つぎのように、フランス経済学が現代理論の形成に多大な貢献を成し遂げたことに注意を喚起している。

相対的効用の名で、彼 (デュピュイ) はすでにコンディヤックが大まかに示したものと同様の価値理論を展開した。しかも、それは数学の応用によってより強固なものとなったのである。…したがって我々は、今日経済科学に不可欠な要素となったように思われる、この偉大な理論がまさにフランスに源泉を持つと主張する正当な理由を有しているのである。(Gide 1890, 609)<sup>41)</sup>

## IV 19世紀末における経済学観の変容と『経済学説史』

### 1. 歴史学派の受容

これまで20世紀転換期に時代を限定して議論してきたが、フランスにおいても、この時期に初めて経済学史研究が出現した訳ではなかった。すでにセイが1828年から29年にかけて出版した『実践経済学講義』の第2巻に34ページにわたる附録「経済学の進歩に関する簡潔な歴史」を付け、1837年には、アドルフ・ブラ

ンキ (Adolphe Blanqui; 1798-1854) が『ヨーロッパにおける経済学の歴史 (*Histoire de l'économie politique en Europe depuis les Anciens jusqu'à nos jours*)』を出版している<sup>42)</sup>。しかしながら、セイ自身は、上述した附録の冒頭で、「科学の歴史というものは、その科学が完成に近づくにつれて短くなるはずである」と宣言し、「馬鹿げた意見や評価されなかった学説を集めることから、我々は何を獲得することができるのだろうか。…誤りは学ぶべきものではなく、忘れるべきものなのである」(Say 1852, tome II, 337-38)と、経済理論の発展に対する絶対主義的な見方を前提に、経済学史に対する懐疑的な態度を隠そうともしていない<sup>43)</sup>。

このような経済学史を軽視する見解が変化し始めたのは、ドイツ歴史学派がフランスに導入され始めた19世紀半ば以降だった<sup>44)</sup>。とはいえ、ただちに経済学史研究が隆盛を極めたわけではない。それでも、フランス歴史学派を代表するE.ルヴァスール (Emile Levasseur; 1828-1911) が、1905-1906年に「第三共和制下フランスにおける経済学説と社会主義学説の展開概要」を『経済学雑誌』に寄稿したように、事実の歴史だけでなく、思想や理論の歴史に対する関心が高まってきていた<sup>45)</sup>。さらに、法学部への経済学教育の導入に関して言えば、とくに民法系の教授が反対するなかで経済学講座の開設を支持したのは、歴史的方法論に親しんでいた法制史など、法学の歴史部門の教員たちだった<sup>46)</sup>。このように見てくると、すでに紹介したように、ジッドとリスト自身は歴史的事実が経済理論に及ぼす影響を限定的に捉えていたとしても、フランスにおけるドイツ歴史学派の受容が『経済学説史』の誕生を促したと言えるのではないだろうか。

## 2. 均衡理論と社会経済学の登場

5巻18章からなる『経済学説史』初版の最終巻は「最近の学説」というタイトルで、第1

章「快樂主義者」、第2章「キリスト教に影響を受けた学説」、第3章「連帯主義者」、第4章「地代理論とその応用」、第5章「無政府主義者」の5章から構成されている。これらの章は、ジッド亡き後の第6版の序文にリストが書いたように、「1870年から1914年にかけての期間を特徴づけるものは、私が見る限り、一方では、均衡と最終的効用というふたつの概念の発見と調琢であり、他方では、長い平和の時期に花開いた社会的学説の隆盛である」(Gide et Rist 2000, VIII)との認識に基づいている。リストのこの言葉は、新しい経済学に対するジッドとリストの意見の相違を踏まえた折衷案ともいえるが、実際、限界効用概念に基づいた均衡理論と協同組合思想を含む「社会経済学」が世紀転換期における新しい経済学だったことは事実である。もっとも、ジッドとリストは、このふたつの新しい経済学に対して、対照的な軌跡を見せていた。II節2で挙げた博士論文のタイトルからもわかるように、リストは労働条件の改善を目標のひとつとする「社会経済学」的な立場から、III節1で触れたように、ワルラス均衡理論に傾斜していったと言える。これに対して、ジッドは、つぎの引用文に見られるように、均衡理論に理解を示しながらも、「社会経済学」の立場をより鮮明にしていたのである。

最近では旧来のものと区別するために〈純粹経済学 (économie pure)〉と呼ぶようになってきているが、経済学 (économie politique) は、とくに、人とモノとの間に成立する自生的で必然的な関係を効用の観点から研究する学問である。この学問は、それらの関係を発見し、説明すること、さらに、あらゆるほかの要因を捨象して得られたいくつかの要因に帰着させることによって数学的に計算することに努めてきた。その出発点は、〈快樂主義の原則〉、すなわち、最小の努力で最大の満足を獲得しようとする欲求である。…社会経済学 (éco-

nomie sociale) は人間の幸福を保障するために、自然法則の自由な作用に委ねることがよいとは決して考えない。それは、反対に、意志的で、よく検討され、同時に、合理的で、ある一定の正義という考え方に合致する組織の必要性を信ずる学問である。(Gide 1920, 5-6)

ここでは、「旧来の」経済学から「快樂主義」に基づく新しい経済学である「純粹経済学」への転換と、それと並行して、自由主義経済学から正義と組織を重視する「社会経済学」への転換という経済学観の二重の転換が語られている。ジッドにとって、法学部の経済学講座がセイの流れを汲む古い分析方法を固守する自由主義経済学にくさびを打ち込む場だったとすると、『経済学説史』は新しい(数学的)手法を開拓した純粹経済学に「社会経済学」を対置する場だったのである。とはいえ、フランス随一のワルラス擁護者と言ってもよいジッドは、このふたつの経済学がともに新しい経済学である事実が重要だと捉えており、単純に対立させることを望んではいなかった。だからこそ彼は、ワルラス理論のみを高く評価するリストを退けて、世紀転換期の新しいふたつの経済学を扱う第5巻の第1章「快樂主義者」と第3章「連帯主義者」をともに自身で執筆したのではないだろうか。

## おわりに

1909年4月18日にジッドはワルラスに手紙を送り、近々『経済学説史』を送付することを予告している。その書簡の中でジッドは、ワルラスの業績を自分が執筆した「快樂主義者」の章とリストが執筆した「地代理論とその応用」で大きく取り上げたことを報告し、「これは遅すぎる正義の実現」だと述べている。リストも5月17日に「フランスがあなたに捧げるべきだった敬意を表明することが、(ジッドと)一

緒に仕事をして以来の私たちの変わらぬ関心事でした」とワルラスに書き送っている。ワルラス自身は、10月23日ジッド宛の書簡で、「注意深く、また満足しながら」著作を読んだことを記し、この二つの章が「土地国有化」を正当化していると評価した(Walras 1965, 222)。

こうして、理論のためのワルラスの経済学史研究とジッドとリストの『経済学説史』は交錯することになった。しかし、I節で見たように、ワルラスの場合とは異なって、ジッド=リストの『経済学説史』は自己の理論構築のための道具ではなかった。経済学史のテキスト、さらには初習者向けの経済学そのもののテキストであり、既存の経済学に対する批判の書でもあった。さらに、イギリスとドイツ・オーストリアに偏していたものの、アメリカも含む外国の経済学を吸収するための手段でもあった。II節で触れたように、フランス経済学を海外に精力的に紹介したジッドは、同時に、逆方向の交流をも期待したのである。だが、本稿では、このような多様な機能をもつ『経済学説史』が、IV節で検討したように、19世紀末から20世紀初頭にかけて現れた、新しい経済学のいくつかの流れを確認することを究極の目的としていたことを強調したい。すなわち、ジッド=リストの『経済学説史』は、世紀転換期における経済学観の変容を象徴する存在だったのである。そして、つぎの引用文が示すように、経済学史が示す理論の変遷が決して一方向のものではないことも、彼らは知っていた。

さまざまな理論が「音を立ててぶつかり合うほど対立することもある。衝突したショックで、それらの理論のなかのひとつが死に絶え、姿を消してしまうこともあるだろう。あるいは、それらが和解し、より高度なひとつの理論に統合されることの方が多いかも知れない。さらには、死に絶えたと信じていた理論が以前よりも、より生き生きと蘇ることさえ

あり得るのである。(Gide et Rist 2000, XVI)

この文章に、理論の衰退と再生を説明する MSRP の萌芽を見いだすことはそれほど的外れではないだろう。経済学の展開に対するこのような捉え方があったからこそ、経済学の発展が経済学史を無用にすると言うセイに抗して、リストとジッドは経済学史に向かったのである。

それでは、ジッドとリストは現今の多様な理論がひとつの理論に収斂してゆく経済学の将来を想定することはなかったのだろうか。『経済学説史』の結論の検討を通じてこの問いに答えることによって、本稿を閉じたいと思う。結論の冒頭で、ジッドとリストは、「科学の進歩は、科学に関する一般的な捉え方そのものさえ変化させる」(Gide et Rist 2000, 865)と、自然科学においても、科学観が普遍的ではないことを指摘している。社会科学である経済学においては、その傾向はさらに顕著になると彼らは考えていた。そもそも、経済学が発展すればするほど、閉じられていた扇が開かれたときのように、差異が明らかになってゆく。しかし、「全体を眺めてみると、…それぞれの理論のあいだに相互に関連をつけてゆく共通の(扇の)生地があることがわかる。すなわち、扇が閉じられていた時に1本の棒だと思いついていたような誤った統一性ではなく、それ以上とは言えないまでも、同じくらいに強い新たな統一性が現れるのである」(Gide et Rist 2000, 865-66)。より深い新たな統一性を発見することが非常に難しいとしても、ジッドとリストはそれをあきらめてはいなかった。しかしそのためには、扇をさらに広く開いてゆくことが必要だった。経済学という「我々の科学をある特定の学派に新たに従属させることほど、その発展にとって危険なことはほかにないにちがいない」(Gide et Rist 2000, 868)と彼らは確信していた。だからこそ、経済学の発展のために、「我々は将来あらゆる競争が排除される日が来ることを見たくない」と

思っている人間の一人」(Gide et Rist 2000, 868)として、ジッドとリストは、多様で異質な経済理論が存在することを指摘し、その共存を生み出した歴史を辿る経済学史を世に送り出したのである。

栗田啓子：東京女子大学現代教養学部

## 注

- 1) 以下では、ジッド=リストの『経済学説史』と表記する。
- 2) Etner (2006) および Le Van-Lemesle (1991)。もっとも、多くのテキストブックは、リールとパリの法学部で経済学史講座を担当したデシャン(Auguste Deschamps; 1863-1935)の『経済学説史』のように、学生向けの簡易製本で出版されていた。
- 3) 栗田 1992, 36. Le Van-Lemesle (2004) は、少数のグラン・ゼコールを例外として、19世紀フランスで経済学教育が進展しなかった理由として、保護主義的な世論の存在を指摘している。彼女によれば、その結果、多くの自由主義経済学者は政治科学自由学院(École libre des sciences politiques)のような少数の私学で講義せざるを得なかったという(p. 34)。本稿では、私学を考察の対象としてはいないが、法学部への経済学教育の導入の社会的背景のなかに世論の変化を含める必要はあるだろう。
- 4) ヨーロッパ最古の大学の一つに数えられるパリ大学の起源は、12世紀に遡る。1257年に宮廷司祭のロベール・ド・ソルボンヌが貧しい神学生のためのソルボンヌ学寮を設置したことから、大学自体も「ソルボンヌ」と呼ばれるようになった(Liard 1909)。
- 5) 栗田 1992, 37.
- 6) エンジニア・エコノミストの誕生については、栗田(1992)を参照されたい。
- 7) 第二世代の代表的なエンジニア・エコノミストとしては、エミール・シェyson(Emile Cheysson; 1836-1910)が1885年から1906年に鉱山学校、クレマン・コルソン(Clément Colson; 1853-1939)が1892年から1932年に土木学校、1914年から1928年に理工科学校の経済

- 学を担当した(栗田1992, 252)。ちなみに、1901年にジッドによる「社会経済学」講座が土木学校に導入されたのは、コルソンの自由主義の色彩が非常に強い経済学講義のバランスをとるためだったといわれている(Etner 2006, 163)。それが事実かどうかは確認できなかったが、少なくとも、1900年の「社会経済学」講座設置は、1899年の政令によって開始された、現実性の重視を唱った土木学校改革の一環だったことは確かである(Brunot et Coquand 1982, 430)。そうであるならば、この講座開設は、世紀転換期に「社会経済」への関心が高まった結果だといえる。「社会経済」および「社会経済学」については、注13を参照されたい。
- 8) セイの流れを汲むフランス古典派経済学者がワルラスの数理経済学に批判的だったことはよく知られているが、エンジニア・エコノミストによる数学の使用に対しても、彼らは批判を加えている。デュピュイとの方法論争については、栗田(1992) 2-1「エンジニア・エコノミストと経済学」を参照されたい。それにもかかわらず、社会主義を標榜するワルラスの場合とは異なって、彼らが完全にエンジニア・エコノミストと袂を分かつことはなかった。それは、両者が自由主義経済に対する信頼を共有していたことと、エンジニア・エコノミストの数学的分析が基本的に公共部門に限定されており、この特定の分野の専門家として許容されていたことによると考えられる。
- 9) Le Van-Lemesle 1991, 365-74. この年に、2年次の必修科目として経済学講座が導入されたのは、エクス、ポルドー、ディジョン、ドゥエ、グルノーブル、リヨン、モンペリエ、ナンシー、パリ、ポワティエ、レンヌ、トゥールーズの12の法学部である。リヨンの経済学説史講座については、Potier(2000)が20世紀前半の状況を分析している。
- 10) Shinn 1980, 122.
- 11) Liard 1909, 67.
- 12) Liard 1909, 60. 経済学系の科目は、財政科学、経済学説史、経済学、統計学、産業経済、農村経済、植民地経済、比較社会経済の8講義である。
- 13) 「社会経済」の起源はル=プレ(Frédéric Le Play: 1806-1882)が1856年に設立した「社会経済協会(Société d'économie sociale)」に遡ることができる。「社会経済」は幅広い概念で、主に労働者の貧困という社会問題に対応するための企業バタナリズムや協同組合運動といった実践活動と、既存の経済学の枠を超えて、経済学を社会学などの隣接科学と融合しようとする理論的試みの両者が含まれている。本稿では、前者の実践活動を含む場合に「社会経済」、後者の経済学の革新を意味する場合には「社会経済学」と訳し分けることにする。「社会経済」の全体像については、Guslin(1987)が詳しい。エンジニア・エコノミストのシェysonと実践活動のひとつとしての労働者住宅との関わりについては、栗田(2006)を参照されたい。
- 14) 『政治経済学雑誌』は、コベスの保護主義やジッドの協同組合主義にとどまらず、マージナリズムや数理経済学にも門戸を開いていた。また、パリの主流派経済学に対抗するために、積極的に海外の読者を獲得するなど、国際的な研究交流にも力を入れていた(Le Van-Lemesle 1991, 369-70)。
- 15) Etner 2006, 162. イタリア生まれのロッシは、1833年に、セイ没後空席だったコレージュ・ド・フランスの経済学講座に就任している。
- 16) Deleplace 2002, 114.
- 17) Le Van-Lemesle 2004, 34.
- 18) Etner 2006, 162. ジッドとリストは、例えば、古代については、リヨンからパリの法学部に移ったスーション(Auguste Souchon)のテキスト、中世については、リールの法学部のデュボワ(Auguste Dubois)のテキストを推薦している(Gide et Rsi 2000, XI)。
- 19) 数学を使用したワルラス経済学がフランスで受け入れられなかったことはよく知られているが、後で見るように、ジッドは、彼自身の経済学とは異なるものの、ワルラスの方法論を積極的に評価した数少ないフランス人経済学者だった。御崎(2010)は、ジッドを「ワルラスが信頼を置いていた数少ない友人の一人」(70)と紹介している。

- 20) 『経済学説史』はジッドの生前に5版を重ね、彼の死後にリストが最終章を書き加えた第6版が1944年に出版され、1947年に第7版まで刊行された。本稿で使用したのは、2000年に出版された第6版の復刻版である。翻訳については、1910年のロシア語訳を皮切りに、20世紀前半にかけて、ドイツ語訳、英語訳、ポーランド語訳、イタリア語訳などがつぎつぎと出版された。日本では、1935年に『経済学説史』の2巻までが古屋美貞註譯『ゼード・リストの経済思想史上巻』として出版され、1936-38年に、全巻が宮川貞一郎訳の上下2巻で刊行されている。
- 21) Pénin 1998, 25-30.
- 22) Pénin 1998, 37.
- 23) Pénin 1991, 303-04.
- 24) 『経済学原理』はこの後も版を重ね、最終的に26版まで出版された (Etner 2006, 196).
- 25) Etner 2006, 196.
- 26) 民衆大学は、労働者たちに教育を提供する目的で1899年にパリで創設されたのを皮切りに、1901年にはフランス各地に124大学が設置されるほど、大きな運動となった (栗田 2013, 33-35).
- 27) ジッドとリストがともに、最新の理論に対する評価の違いがあることを認識した上で、意見の違いを調整する必要を認めなかったことは、「序文」で明言されている (Gide et Rist 2000, XVII).
- 28) 第6巻は、ジッドの死後、1844年に出版された第6版でリストが補足した部分である。ジッドとリストがともに改訂した最終版の第5版では、第5巻が、「最近の学説」として、最終巻になっている。
- 29) Etner 2006, 196-97
- 30) 現代の経済理論の状況を象徴する事例として、ジッドは、この「新古典派」と歴史学派の対立を挙げている (Gide et Rist 2000, 547).
- 31) とはいえ、目次を見てもわかるように、フランスの経済学者の比重が比較的高いことは事実である。実際、ジッドとリストも「フランスの学説におそらく過大な部分を割り当てた」ことを認め、それがフランス人の学生を読者として想定したためだと説明している (Gide et Rist 2000, XI)。もっとも、後で見ると、ジッドがフランス経済学の復権を意識していたことを考えると、このフランス経済学の優遇も当然のことかも知れない。
- 32) ワルラスにおける経済学史研究については、御崎 (2010) が、純粋経済学だけでなく、応用経済学・社会経済学を含めたワルラス体系の構築という観点から、詳細に分析している。
- 33) 経済学史研究における絶対主義的アプローチと相対主義的アプローチについては、Blaug (1985) 序章を参照のこと。
- 34) 古屋美貞註譯『ゼード・リストの経済思想史上巻』の書評において、手塚寿郎は、第一の指摘に関して、「…重農学派の発生も、古典派の発生も、特にこの派の自由貿易主義学説も、それらの学説を生んだ経済的環境を考ふることなしに、説明の下され得べきものではなからう」と批判し、第二の指摘については、「やむを得ない」としながらも、生涯を割愛したことによって「如何にも深まない著作らしく見せしむる憂はある」と不満を呈している (手塚 1935, 178).
- 35) この解釈はジッドも共有していた。彼はパルグレイヴの『経済学事典』で、1848年の2月革命の失敗が社会主義思想を後退させ、自由主義経済学の隆盛を招いた要因と指摘している (Gide 1896, 157).
- 36) フランス経済学が革新の機会を失った理由として、ジッドは、「サロン」と化したフランス学士院を中心とするパリの自由主義経済学者のグループの閉鎖性を挙げている (Gide 1890, 615-18).
- 37) 普仏戦争での敗北の影響の大きさは、経済学に限っても、マルサス人口論への評価の変化にも見られる。
- 38) Gide 1896, 158.
- 39) 『経済学説史』では、第1巻第3章が悲観主義者、第3巻第1章が楽観主義者に当てられている。
- 40) Gide 1890, 614; 1896, 158. 彼は、さらに、この姿勢が動学的視点の欠如につながっていることも指摘している。

- 41) もっとも、『経済学説史』では、デュピュイは限界効用概念を「最初に考え…」、「需要曲線を初めて描いた…エンジニア」として、第5巻第1章第2節「心理学派」と第3節「数理経済学派」の注で取り上げられているにすぎない (Gide et Rist 2000, 552, 563).
- 42) アドルフ・ブランキは、革命家として知られるオーギュスト・ブランキ (Auguste Blanqui; 1805-1881) の兄だが、自由主義者として、政府介入に反対するとともに、自由貿易の推進に尽力した経済学者である。工芸学院の経済学講座におけるセイの後任でもある。
- 43) ジッドとリストは、セイのこの文章を引用し、「我々は、誤りを研究することが豊かな結果をもたらすことを知っている。…というのは、ほんの小さな真実のかげらも含まない誤りはないからである」とセイを批判している (Gide et Rist 2000, XIII).
- 44) フランスに最初に紹介されたドイツ歴史学派の著作は、ロツシャーの『国家経済学要綱』である。この翻訳が刊行された1857年以降、『エコノミスト誌』や『政治経済学雑誌』で経済学方法論をめぐる議論が活発に展開され、メンガーとシュモラーの方法論争も大きな反響を巻き起こした (Breton 1991, 399-400).
- 45) Levasseur (1905-1906). 経済史家として有名なルヴァスールは、実は、コレージュ・ド・フランスにおいて「経済史および経済統計」の講義を担当する前の1871年に「経済学説史」講座に就任している。
- 46) Le Van-Lemesle 2004, 34.

### 参考文献

- Blaug, Mark. 1985. *Economic Theory in Retrospect*, 4th ed. Cambridge: Cambridge Univ. Press (1st ed. 1962). 久保芳和・真実一男・杉原四郎・宮崎犀一・関恒義・浅野栄一訳『新版 経済理論の歴史』I-IV, 東洋経済新報社, 1982-86.
- Breton, Yves. 1991. Les économistes français et les questions de méthode, in Breton et Lutfalla 1991, 389-419.
- Breton, Yves et Michel Lutfalla (sous la direction de). 1991. *L'Économie Politique en France au XIX<sup>e</sup> Siè-*

- cle*. Paris: Economica.
- Brunot, A. et R. Coquand. 1982. *Le Corps des Ponts et Chaussées (Histoire de l'Administration Française)*. Paris: Éditions du Centre National de la Recherche Scientifique.
- Cot, Annie L. et Jérôme Lallement. 2000. L'éventail et le pendule, in Gide et Rist 2000.
- Deleplace, Ghislain. 2002. The Present Situation of the History of Economic Thought in France. In *The Future of the History of Economics*, edited by E. Roy Weintraub, *Annual Supplement to Volume 34 of History of Political Economy*. Durham and London: Duke Univ. Press, 110-24.
- Dockès, Pierre et al. 2000. *Les traditions économiques françaises. 1848-1939*. Paris: CNRS Éditions.
- Ether, Francois. 2006. *Les Historiens de la Pensée économique*. Paris: Economica.
- Gide, Charles. 1890. The Economic Schools and the Teaching of Political Economy in France. *Political Science Quarterly* 5 (4): 603-35.
- . 1896. French School of Political Economy. In *Dictionary of Political Economy*, edited by Palgrave, vol. II, 154-60.
- . 1907. Economic Literature in France at the Beginning of the Twentieth Century. *Economic Journal* pp. 192-212.
- . 1920. *Les institutions de progrès social*. Paris: Recueil Sirey.
- Gide, Charles et Charles Rist. 2000. *Histoire des doctrines économiques depuis les physiocrates jusqu'à nos jours* (1ère éd., 1909, 6<sup>e</sup> éd., 1944). Paris: Dalloz.
- Gueslin, André. 1987. *L'invention de l'économie sociale. Le XIX<sup>e</sup> siècle français*. Paris: Economica.
- Le Van-Lemesle, Lucette. 1991. L'institutionnalisation de l'économie politique en France, in Breton et Lutfalla 1991, 355-88.
- . 2004. Le juste ou le riche. L'enseignement de l'économie politique. 1815-1950, *Courrier des statistiques (INSEE)*, n° 111, 33-36.
- Levasseur, Emile. 1905-1906. Aperçu de l'évolution des doctrines économiques et socialistes en France sous la III<sup>e</sup> République. *Revue d'économie politique* 1905, tome XX, 873-913 et 1906, tome XXI, 1-28.
- Liard, Louis. 1909. *L'Université de Paris (Les Grandes Institutions de France)*. Paris: Librairie Renouard.
- Pénin, Marc. 1991. Charles Gide. 1847-1932. L'hétéro-

- doxie bien tempérée, in Breton et Lutfalla 1991, 303-34.
- . 1998. *Charles Gide. 1847-1932. L'esprit critique* (1ère éd. 1997). Paris: L'Harmattan.
- Potier, Jean-Pierre. 2000. L'enseignement de l'histoire des doctrines économiques à la faculté de droit de Lyon: l'apport de René Gonnard, in Dockès et al. 2000, 885-98.
- Rist, Charles. 1955. Notice biographique. *Revue d'économie politique* vol. 65, novembre et décembre, 977-1045.
- . 2002. *Histoire des doctrines relatives au crédit et à la monnaie depuis John Law jusqu'à nos jours* (1ère éd. 1938, 2<sup>e</sup> éd. 1951). Paris: Dalloz.
- Say, Jean-Baptiste. 1852. *Cours complet d'économie politique pratique* (1ère éd. 1828-29), 3<sup>e</sup> éd. 2 tomes. Paris: Guillaumin.
- Shinn, Terry. 1980. *L'Ecole Polytechnique. 1794-1914*. Paris: Presses de la fondations nationales des sciences politiques.
- Walras, Léon. 1910. Doctrines économiques, *Gazette de Lausanne*, 6 janvier, in *Mélanges d'économie politique et sociale (Œuvres complètes d'Auguste et Léon Walras, vol. VII)*. Paris: Economica, 1987, 515-17.
- . 1965. *Correspondence of Léon Walras and Related Papers*, edited by Wiiliam Jaffé, 3 vols. Amsterdam: North Holland.
- 栗田啓子. 1992. 『エンジニア・エコノミスト—フランス公共経済学の形成』東京大学出版会.
- . 2006. 「世紀転換期フランスの企業パターナリズムと住宅政策—エミール・シェイソンの労働者都市と田園都市構想」東京女子大学社会学会紀要『経済と社会』34:37-60.
- . 2013. 「バル・エボックにおける『社会経済』—パリとナンシーを歩く」『中央評論』282:26-35.
- 手塚寿郎. 1935. 「古屋美貞註譯『ヂード・リストの経済思想史上巻』」『商学討究』10 (2): 174-79.
- 御崎加代子. 2010. 「レオン・ワルラスの経済学史観—純粹・社会・応用経済学の起源」『彦根論叢』2010 夏号 (No. 364): 60-72.

## A New Trend in the History of Economic Thought in Nineteenth-century France:

An Analysis of Gide and Rist's *History of Economic Doctrines*

Keiko Kurita

The paper raises two issues: first, it shows unique characters in the history of economic thought in France, and second, it clarifies the disciplinary position of the History of Economic Thought in French higher education at the end of the nineteenth century. Thus, the paper intends to define the historical contexts in which the academic discipline of the History of Economic Thought gained such social and institutional significance in France at the time.

An examination of the nineteenth-century process of French institutionalization of economics in higher education demonstrates a rivalry between the “Grandes Ecoles” and the universities. Classical economics in Say’s tradition dominated the former institutions, excepting a few engineering schools where mathematical economics was introduced. In universities, the course of economics was instead established first in law faculties, and the History of Economic Thought was introduced as training for law students in economics. Gide and Rist wished

to show the students various trends of economics and, for that purpose, published their *History of Economic Doctrines* as a course textbook.

Both authors were Protestants and supporters of Dreyfus during the famous affair (1894–1906). They sided more or less with the economic ideas of Walras and social economics. Their common scientific outlook involved a method of balanced grouping, mapping, and the assessment of various theories by way of inhibiting a particular inclination to endorse any one of them. This method served their common central goals of relativizing different theories, and resulted in successful abating of the dominance of classical economics of the time. It was these ideas, in fact, that characterized their works. Finally, their ideas were able to show the significance of newly emerging trends and theories like mathematical economics and social economics.

JEL classification numbers: B 19, B 31, N 33.